

つある現代では、鮮度保持対策をしない産地は流通のネットワークから脱落しようとしています。最近では、氷温輸送という新しい流通のネットワークも確立されてきたことから、こうした輸送形態の変化に即応できる体制作りも急がなければなりません。

都市間交流事業

農林漁業各分野において、地域の生産体制を強化し、その再編を図っていくためには、担い手を確保・育成していくことが最大の課題といえます。そのためには、地域内の住民や小中学生等を対象とした確保・育成対策が基本になるのですが、近年、都市住民を中心に、余暇を利用した自然志向が高まりを見えています。そこで、都市の勤労者や小中学生も対象として、当地域の自然・農林漁業に直接ふれ、また、地域の農林漁業者と交流を深めてもらうことが、新たな担い手を確保する上で大きな効果があるものと考えられます。

商工業部門

空港の開港による全国一日交通圏への参入に対応し、また二十一世紀という来るべき新時代にふさわしい街を県北に形成するためには、官民が一体となった街づくり計画の策定が必要です。

そのような中、商業分野においては、都市間競争に対抗できる地域全体の土地利用を模索し、個性的な魅力のある商店街を形成することが課題となります。空港は、当地域の空からの新しい玄関口となりますから、利用客に与える第一印象を大切にしなければなりません。そのため、空港地区にターミナルビルを含めた商業機能の集積を図ることが必要といえます。また、当地域の資源を活用する意味から、特産品を商品として育てることも大切です。ネーミング、形、包装、加工方法等さまざまな面から新たに検討を加えていくこととなります。販路の拡大のため、イメージ戦略（航空便、県北地域の自然、歴史、物語等）を中心としたPR活動の展開もキーポイントになってきます。

工業分野では、空港の開港によって、主要都市との間の時間距離が飛躍的に短縮されること、また近年、各企業において、自然環境に配慮した活動の傾向が見られることなどから、当地域の豊かな自然環境を背景として、新時代へのけん引的な役割を持つ、先端技術型産業（研究施設を含む）や自然共生型産業の誘致が望まれます。また、全国的な水不足により工業用水不足が深刻化していることから、当地域の豊富な水を生かせる産業の誘致についても検討し、臨空工業団地の形成を図ることも

有効な策といえます。

商工業の振興にとって、空港を軸としたアクセス網の整備は不可欠です。そのため、圏域内アクセス網の整備促進と、圏域外へのアクセスとして高速自動車道インタチェンジの設置等を検討することが急務となっています。また、空港を軸としたアクセス網を活用し、商工業のローコスト化も図らなければなりません。そのためには、空港周辺地区に県北地域の拠点となる物流施設を整備したり、当地域の重要港湾である能代港と連携をとったりするなどして、物流ネットワークの形成を促進することが大切です。

観光部門

広域観光ルートの設定

大館能代空港の開港は、高速交通の空白地帯であった米代川流域にとつて、観光面では特に大きな期待が寄せられています。拡大する自由時間と高まる余暇志向という時代背景から、県北地区の課題は、充実した余暇の場を提供する地域として整備し、PRしていくことにあると考えられます。

具体的には、大館能代空港が北東北三県の中心に位置し、十和田八幡平に隣接するという特性をメインに掲げ、さらに白神山地や森

吉山といった魅力ある観光資源をネットワークする広域観光ルートを形成することが必要と思われる。県北地区には、自然、施設、行事、物産等、各種観光資源が多様に存在しています。広域観光ルート設定の大きな要素となるこれらの資源について、誘客力の強弱や特性を洗いだし、区域内の観光拠点としての位置付け（主・従）を明確にしなければなりません。

受入体制の整備

また、外部からの観光客を増やし、その滞留化を進めるために、既存の宿泊施設の地域別の収容力とグレード等について検討し、施設の整備や新規開発の目安を決定しなければなりません。見学施設や食事・休憩施設等についても、広域観光ルートの設定と関連づけて、整備の必要性を把握することになります。

観光客は、自然の美しさや施設の素晴らしさもさることながら、最終的にはそこに住む人との交流を求めているものです。このことは、地元住民が地域を理解し、訪れる人を温かく迎える姿勢がいかに大切であるか、ということを示します。そのため、観光案内人制度の検討や旅館業者等の接遇研修の充実、さらに教育現場での観光授業や国際化社会への対応のありかたが、ますます大切になるものと思われま

オフシーズン対策

県北地域の冬は、寒くて日が短く、積雪や降雪によって道路をはじめとした交通機関に制約を受けます。そして何よりも、風景が荒涼としていることから、これまで「冬は観光客が少ないものだ」という先入観念が強く存在していました。しかし、このような自然条件が風情あるものとして見直され、観光の魅力の一つに数えられるようになった昨今では、当地域の冬はまさに魅力的な観光資源ととらえることができます。そのため、今後は各地域の冬の行事について広域的な連携を模索し、新たなイベント（雪国生活体験、冠雪風景、スキー修学旅行等）を実施することが望まれます。また、スポーツ拠点として今後完成する大館地区多目的ドームや能代山本スポーツリゾートセンター、さらには大野台地区の北欧の杜公園の利活用を図ることにより、冬期間も自信を持って誘客活動を展開できるものと考えられます。

空港建設工事、いわゆるハード面は順調に進展してきましたが、ソフト面、すなわち開港後をにらんだ利活用事業はこれからが正念場となります。開港まで三年あまり、長い猶予期間とはいえませんが、今後も県北一丸となった取り組みを続ける必要があります。